

〈コラム〉

健康社会学との出逢い

島内 憲夫*

Norio SHIMANOUCHI*

私は、昭和47年3月に順天堂大学体育学部卒業、同大学院体育学研究科修士課程を昭和49年3月に修了後、昭和49年4月1日に体育学部健康教育学専攻の保健社会学研究室の助手として採用されました。以来、41年間順天堂大学でお世話になりました。

私の専門は、「健康社会学」ですが、すべては順天堂大学体育学部への入学から始まりました。恩師は、東北大学出身の沢口進先生です。先生は、昭和34年に日本で最初に順天堂大学体育学部で「保健社会学」講義を開始しました。先生が大学を去られた後、保健社会学研究室を継承しましたが、沢口先生にお断りをした上で、私は平成4年に「保健社会学」を日本で最初の「健康社会学」に名称を変更しました。平成27年4月から弟子の鈴木美奈子先生が継承します。

保健社会学の世界に入った頃、私が常に大切にしていたことは「健康・社会を解釈することではなく、変革することである。」と言うことでした。また、「生活者の論理の貫徹」も意識していました。保健社会学を恩師の沢口先生から継承した当時考えていたことは、保健社会学の理論の出発点でした。「ヘルスケアとは何か。それは、人間存在にとっていかなる意義と限界を有するか。この問いは、なんら、高踏的な問いではなく、極めて日常的な問いなのである。経験科学としての保健社会学は、ヘルスケアの構造と動態を固有の社会学的な視角から明らかにしなければならない。過去から現在に至る人間のヘルスケアの構造の歴史的展望とヘルスケアの本来の意味に対する批判的・客観的な方法・態度がヘルスケアと社会の関連を分析・総合する学としての保健社会学には要請されているのである。」実は、私は保健社会学に出会った時から「健康社会学」の構想を練っていました。なぜなら、生活者の論理の

完結を貫くためには、保健医療従事者の論理ではない学問体系が必要だと直感したからです。1986年デンマークのコペンハーゲン大学医学部社会学研究所に留学した時の夏に、保健社会学を健康社会学に変更することを決意しました。その年の暮れに国際社会学会会議が医療社会学部会を健康社会学部会に名称を変更しましたので、私の直感は当たっていました。私の考える「健康社会学とは、人々の健康を支えている現実を人生、愛、夢そして生活の場である街、地域社会、職場、学校、家族、保健医療施設等との関係において理解した上で、その健康を創造する知識と技術(ヘルスプロモーション)を社会的視点から明らかなしく科学である。」(島内憲夫・鈴木美奈子：2005)

最後に、確認しておきたいことは、健康社会学は人々の「幸福」追求のために存在する科学であるということです。この「幸福追求」は、ギリシャ時代から多くの哲学者・宗教家が語り続けてきた人間の本質に関わる課題です。「幸福とは自分自身の存在や生きている実感力をもたらせてくれる感情である。それは、素敵な・大切な人の存在(心の居場所)、物事の価値への気づき(心の豊かさ)、自分のやりたいことや望むことができる場(心の行き場所)がある状態から生まれてくる。」(島内憲夫・鈴木美奈子：2005)と考えています。そして、その幸福は、愛の存在なしには生まれれないということも明らかかなことです。「愛とは、愛する人と共に今を生きていることの喜びを共感し、未来を生きる力を生み出す主体的な行為である。愛は、我々に共に「いる・ある」ことの価値とマナーを自覚させてくれる。」(島内憲夫：2000年)

最後に、順天堂大学スポーツ健康科学部の学生・院生・教職員の皆さんにエールを送る意味で次の言葉を贈りたいと思います。

夢はあなたの明日を創る！ Your dream will create your tomorrow!

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University